OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | Towards Effective Teaching Methods in EFL Listening for Intermediate Learners |
| Author(s) | 上田, 眞理砂 |
| Citation | 大阪大学, 2015, 博士論文 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/52092 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

# 論　文　内　容　の　要　旨

| 氏　名　（　上田眞理砂　） | |
|---|---|
| 論文題名 | Towards Effective Teaching Methods in EFL Listening for Intermediate Learners<br>(中位層を対象とした効果的なリスニング指導法を目指して) |

論文内容の要旨 (4330語)

本論文は、日本人英語学習者の中でも特に中位層を対象に、効果的なリスニング指導法について論じている。本論文の特徴は、大きく4つに分類される。

1つ目は、日本人英語学習者の中で一番対象者数が多い、中位層に特化した研究である。
2つ目は、学習者のリスニング能力に応じて、最適の学習方法を提案している。
3つ目は、実験前後の実験協力者のリスニング能力測定及び実験協力者の分類に、標準テストを用いた。
4つ目は、リスニング能力向上には、メタ認知における問題解決能力の向上が重要であるということを明らかにした。

大学生に中学や高校でリスニングに関して、どのような指導を受けてきたのかを尋ねてみると「注意して聞きなさい。」「わかるまで何回も聞きなさい。」という回答がほぼ全てである。これは、1970年代と全く同じ指導法である。約40年間、変化が無いこと自体が問題ではなく、その指導法で、日本人英語学習者の多くが未だにリスニングを不得手としていることが問題なのである。「聞いただけではわからないが、見たら（読んだら）わかる。」という学習者は非常に多い。旧態依然としたリスニング指導を、もっと効果的にすることが強く望まれる。

第1章では、研究目的、論文構成、本研究で用いられる語句の定義、コミュニケーションにおけるリスニングの占める割合を述べている。本論文では、中位層学習者(TOEIC®のリスニング･テスト495点満点中、166～330点の学習者)を対象としているが、理由は一番人数が多いからである。2011年のTOEIC®公式データによると、日本人全受験者の68.1%がリスニングにおいて中位層である。この現象は2010年、2012年も同じであった。英語学習者の大半がリスニングにおいて中位層であるという現象は、日本を含むアジアや南米の多くの国にも共通している。中位層を対象とした、学習者の能力に合わせた効果的なリスニング指導法を、実証的研究により導きだすことができれば、日本のみならずアジアや南米諸国の英語学習者にも有益である可能性を示している。

第2章では、本研究の基礎となっている2つの理論やリスニング･ストラテジー(LS)についての先行研究で明らかになっていることや論争が継続していること、その原因を論じている。認知科学の分野においてSchneider and Shiffrin (1977)は、人間の情報処理には2段階(制限過程と自動過程)あると述べている。前者は意識しなければ遂行できない行動で、後者はそれを繰り返し行うことで、徐々に意識しなくてもできるようになってくる行動である。また、応用言語学の分野ではAnderson (1980)が、言語学習における3段階(perception, parsing, utilisation)からなる認知心理学理論を唱えている。この理論を用いれば、どのレベルで学習者が理解できなくなったかをピンポイントで指摘することが可能である。先行研究で明らかになっていることは、主に3つで、上位層学習者はトップ･ダウンとボトム･アップの両方を用いているということ、下位層学習者は主にボトム･アップを用いているということ、両者の決定的な相違は上位層学習者が複数のメタ認知ストラテジー(planning, monitoring, evaluation)を用いているということである。論争が継続している点は、上位層学習者が用いているLSを下位層学習者に指導すれば、リスニング能力が向上するのではないか、ということであり、賛成派と懐疑派に分裂している。その原因の一つとして、多くの先行研究において標準テスト(国際的に有名であり、入手が容易、なおかつ他のテストと互換性があるテスト)が使われていないことや実験協力者がどのように選別･分類されたのかが明確にされていないことが考えられる。標準テストが用いられていないことにより、多くの先行研究結果を他の研究結果と科学的且つ客観的に比較することができないのである。そこで、本論文では標準テストとしてTOEIC®のリスニング･テストを用い、3分割 (0～165, 166～330, 331～495) した上で、166～330

点の学習者を中位層学習者として実験協力者とした。TOEIC®は以下の様に、複数の標準テストに大まかではあるが換算可能である。

| TOEFL® | TOEFL®iBT | IELTS | Cambridge | TOEIC® | EIKEN |
|---|---|---|---|---|---|
| 677 | 120 | 9.0 | CPE | 990 | |
| 650 | 115 | 7.5–8.5 | | 890 | |
| 600 | 100 | 6.0–7.0 | CAE | 660–810 | Grade 1 |
| 550 | 80 | | | | |
| 500 | 61 | 5.5 | FCE | 590 | Grade Pre-1 |
| 470 | 52 | 5.0 | | 450–520 | |
| | | 4.5 | | | |
| 450 | 45 | 3.5–4.0 | PET | 310–380 | Grade Pre-2 to Grade 2 |
| | | 2.5–3.0 | KET | 220 | Grade 3 |
| | | 1.0–2.0 | Young Learners | | Grade 4 to 5 |

第3章では、第1実験としてディクテーション訓練とLS訓練の実証研究手法や結果を論じている。前者は上記2つの理論に基づいた訓練で、音素や語句の音声による知覚･反復学習である。後者は、複数のメタ認知ストラテジーの理論と実践学習である。実験期間は15週間、初回講義でTOEIC®のリスニング･テストで108名の実験協力者を選別し、3群(統制群10名、ディクテーション訓練群52名、LS訓練群46名)に分類した。第2～14週の13週間毎週1回、統制群には通常講義のみ、ディクテーション訓練群には、弱音や連結などを含むディクテーション訓練を、LS訓練群には複数のLSの理論と実践を各群90分の通常講義内に30分行った。最終週である15週目にTOEIC®のリスニング･テストを実施し、第1週のデータと比較して各訓練の効果を分析した。分析手法には、分散分析や多重比較(ライアン法)、効果量、分散図を用いた。その結果、ディクテーション訓練とLS訓練の両方に有意差が得られた。また、中位層学習者をさらに下･中位層学習者(第1週のTOEIC®のリスニング･テストで166～249点の学習者)と上･中位層学習者(第1週のTOEIC®のリスニング･テストで250～330点の学習者)とに分けて分析した結果、前者には特にディクテーション訓練に有意差が得られた。この結果は、人間の情報処理や言語学習には下から積み上げるように、段階を経て向上していくという上記2つの理論と整合する。

第4章では、第2実験として第3章で有意差が得られた2つの訓練を複合した複合訓練の実証研究手法や結果を論じている。実験期間や実験協力者の選別･分類、実験結果の分析手法は第1実験と同様である。実験協力者は57名で、統制群(28名)には通常講義のみ、複合訓練群(29名)には第1実験で実施した両訓練を90分の通常講義内にそれぞれ30分ずつ合計60分行った。第1実験では2つの訓練に有意差が得られたが、得点が下がった学習者もいた。そこで、第2実験では、MALQというリスニングにおけるメタ認知に関するアンケートという分析要素を増やし、第1及び15週に実施した。結果、複合訓練に有意差は得られなかった。個々に指導された場合、有意差が得られる指導法であっても、複合された場合、中位層には処理しきれない膨大な情報量となってしまい、効果がなかったと推測される。この結果は、上記2つの理論と整合する。また、MALQの分析結果から、複合訓練群の点数が上がった上位11名の学習者に共通することは、計画/評価能力と問題解決能力の向上であった。具体的には、聞く前にどのように聞くのか計画を立てたり、聞いた後に次回からはどのようにして聞くべきであるかを内省したり、分からないところがあっても、言語能力のみならず他の認知能力を活用し、諦めずに聞き続け理解しようとする態度や今までの理解が間違いであると判断した時は、直ぐに考えを切り替えるといった能力の向上である。

第5章では、第3実験として第1実験の瑕疵2点(統制群の実験協力者数が10名と少なかったことやMALQを用いていなかったこと。)を補うための実証研究手法や結果を論じている。実験期間や実験協力者の選別･分類、実験結果の分析手法は第1実験と同様であり、MALQを第1及び15週に実施した。実験協力者は94名で、統制群(23名)、ディクテーション訓練群(34名)、LS訓練群(37名)に分類した。結果、第1実験と同様にディクテーション訓練とLS訓練の両方に有意差が得られた。特に上･中位層学習者にはLS訓練に有意差が得られた。この結果は、第1･2実験同様、上記2つの理論と整合する。さらに、MALQの分析結果から、特別なリスニングの訓練を受けない場合やディクテーション訓練ではメタ認知ストラテジーは向上しないことも明らかになった。LS訓練は、翻訳をせずに聞く能力や聞く前にどのように聞くかの計画を立てたり、聞いた後に次回からはどのようにして聞くべきであるかを内省したり、分からないところがあっても、言語能力のみならず他の認知能力を活用し、諦めずに聞き続け理解しようとする態度の向上に効果がある

ことが判明した。点数が上がったLS訓練群の上位12名の学習者に共通することは、第2実験同様、問題解決能力の向上であった。具体的には、分からないところがあっても、言語能力のみならず他の認知能力を活用し、諦めずに聞き続け理解しようとする態度や今までの理解が間違いであると判断した時は、直ぐに考えを切り替えるといった能力の向上である。

第6章では、 3つの実験結果をまとめるとともに、研究結果を元にした学習者の習熟度に応じた診断的で具体的なリスニング指導法を述べた。また、今後の研究の指針として次の3点を述べた。

(1) アジアや南アメリカの国での研究：中位層学習者が大半を占めるこれらの国で、本研究と同様の研究を行った場合、同様の効果や結果が得られるだろうか。理論的には、本研究と同様の結果が得られる筈であるが、文化や習慣などの違いという要因もあり、リスニング研究へのさらなる貢献のために研究結果を検証する必要がある。

(2) 統制群無しでの研究：一週間に一度30分通常講義の中で、先にディクテーション訓練を6週間、その後LS訓練を同期間指導する群と、先にLS訓練を6週間、その後ディクテーション訓練を同期間指導する群の2群に分けて実験を行った場合、どのような効果や結果が得られるだろうか。実証的な研究であっても、統制群を持たない新しいスタイルの研究の可能性を検証する必要がある。

(3) 教室で導入する指導法の効果について：統計的に有意であると出た指導法であっても他の指導者が同じ方法を用いて効果を挙げるかどうかは別の問題である。効果を上げるためには、適切な運用が欠かせず、適切な運用は指導者が常に学生の反応や理解度といった現場を見ながら判断していくことが重要で、方法と運用は常にセットになっていることを指導者は強く認識する必要がある。最終的には、様々な条件や制約を考えながら如何に本研究結果を教育の現場に還元するかを考えていかねばならない。

様式７

# 論文審査の結果の要旨及び担当者

| 氏　　名　（ 上田　眞理砂 ） | | |
|---|---|---|
| 論文審査担当者 | （職） | 氏　　名 |
| 主 査 | 教授 | 上田　功 |
| 副 査 | 教授 | 日野信行 |
| 副 査 | 准教授 | 村上スミス・アンドリュー |

## 論文審査の結果の要旨

本研究は日本人英語学習者の、特に中位の運用能力を有する学習者に対する、効果的なリスニング指導法を考察したものである。審査対象論文は６章に分かたれている。以下に章ごとの要点をまとめる。

1.　第1章では本研究を着手するに至った問題の所在が主に述べられている。現在リスニングの必要性が高まっているにもかかわらず、わが国におけるリスニング指導は、学習者にスクリプトを渡して、わかるまで何度も注意して聴かせるという、学習者の自立性のみを求め、「習うより慣れよ」式の指導が、1970年代から現在まで続いており、ために期待される効果は上がっておらず、合理的な理論や研究成果に基づいた指導が望まれる所以である。また中位層が学習者数として一番多いにもかかわらず、これまで研究が手薄であったことが述べられている。

2.　第2章は先行研究のレビューである。まず先行研究で明らかになったことが、Schneider and Shiffrin (1977)の情報処理理論と、Anderson (1980) の認知心理学理論に言及しつつ紹介される。具体的には、リスニングにおいて、下位学習者はボトムアップ処理をおこなっていること、上位学習者はトップダウンとボトムアップの両方の処理をおこなっていること、両者の違いは、後者が複数のメタ認知的ストラテジーを使用しているという3点である。当然下位学習者にもトップダウン型のストラテジーを導入すればよいという議論になるが、先行研究においては、導入の是非に関して議論が分かれ、決着を見ていない。これは先行諸研究では、実験協力者の英語能力や、その選抜・分類が客観的に示されておらず、実験結果を客観的に比較することが困難であることが主たる原因となっている。本章は、最後に互換性のあるテスト導入の必要性を論じて終了する。

3.　第3章からは、中位層の学習者に対して筆者がおこなった実験について、その作業仮説、方法、結果、考察が説明される。第3章では、第一の実験として、比較的能力の低い者には、下位層向けのボトムアップ学習をおこなった方が、上位層向けのトップダウン学習より効果が上がるという作業仮説に基づいて、あらかじめ互換性のあるテストにより中位層として選別された大学生3グループに対して、それぞれボトムアップのディクテーション訓練、トップダウンの聴き取り方略に基づく訓練を、15週間にわたっておこなっている。（第三のグループは統制群である。）そしてポストテストの結果を、分散分析、ライアン法多重比較、効果量、分散図等の統計手法を用いて分析している。結果は両方のグループに学習前と比較して有意差が得られたが、特に中位のなかでも下位の学習者にディクテーション効果が見られたことで、作業仮説に矛盾がないことを示している。

4.　第4章は第二の実験を解説している。作業仮説は、ボトムアップとトップダウンを併用しても効果がないというものであり、このためにディクテーションとリスニング方略の両方を学習グループと、統制群に分け、上記と同じ手順で実験をおこなったが、結果としては二群間には有意差が見られなかった。これはどちらの学習法も効果はあるが、一度に併用すると、中位学習者には処理しきれない情報量となり、効果がでないことを示している。

5.　第5章は第三の事件に関する章であり、中位でも相対的に高い能力をもつ学習者には、トップダウン学習が効果的であるとする仮説を検証する。実験手法は第一の実験と同じで、ディクテーション群、リスニング方略群、統制群の3グループの習得結果を調査している。結果はディクテーション群とリスニング方略群両方に有意差が見られたが、作業仮説の中位学習者の上位のものには、リスニング方略に基づいた学習が効果的であることが検証されている。

第二と第三の実験ではMALQと呼ばれるリスニングにおけるメタ認知に関する調査をあわせておこない、リスニングの能力の向上には、広義の問題解決能力（わからないところがあっても、言語知識や他の認知能力でカバーすること、また理解が間違っていたときには、ただちに考えを切り替える判断力、そして聴く前にどのように聴くかを計画策定

し、聴き終わった後にも反省し次回に活かそうとする姿勢等）が特に重要となることを論じている。
6.　第6章では3つの実験から得られた結論とその示唆するところがまとめられている。（1）中位学習者全般を考えた場合、ボトムアップとトップダウンどちらも効果的であるものの、（2）その中で下位のものにはボトムアップが、上位のものにはトップダウンの学習が効果的であること、（3）複合学習は効果がないこと、（4）リスニング能力はメタ認知能力に大きく依存すること、（5）ボトムアップ訓練だけでは、メタ認知能力は育たないこと、以上である。
　最後に本研究の意義と具体的なリスニング指導法への示唆が論じられ、最後に、研究対象や研究方法、そして教育現場への応用に関して、今後の課題が述べられる。

　本論考の評価であるが、まず客観的な能力の変化を判断しにくいリスニング学習について、ボトムアップとトップダウンという2つの相反する学習法に注目し、さらに先行研究では不十分であった中位層の学習者を対象としている着眼点がすぐれている。また実験では作業仮説をたてて、これを検証していくという、いわば演繹的アプローチを取り、手堅い統計的手法を用いた数量的な解析により、学習効果を客観的に判断している。さらに議論の展開は論理的であり、導かれる結論には説得力がある。そして結論の示唆する諸点は、今後教育現場に大きく裨益する可能性を含んでいる。
　本論文は、中位層そのものの分類や、その中での下位と上位の線引き基準の妥当性、メタ認知を議論する根拠となるMALQの客観性等に、まだ詰めるべき課題は残るものの、博士（言語文化学）の学位論文として、十分価値があると認めるものである。

以上